都道府県名	石川県

Ⅰ　学校の概要（平成１５年４月現在）

学校名	小松市立芦城小学校								
学　年	１年	２年	３年	４年	５年	６年	特殊学級	計	教員数
学級数	２	２	３	３	３	３	４	２０	３０
児童数	７７	７９	９６	９０	１０	９９	５	５４９	

Ⅱ　研究の概要

１．研究主題

確かな学力の向上を図る教育活動を求めて
～豊かな人間性を培い、基礎・基本の確実な定着を～

２．研究内容と方法

(1)　実施学年・教科

・全学年　算数科
児童の理解や習熟の度合いに個人差が出やすい教科、また学校として、算数科習熟度別等少人数指導による継続的な研究実績があるため。

・全学年　国語科
国語力は全ての教科の基礎となると考えられ、客観的に学力の定着を把握することが課題となる教科であるため。低学年は習熟度別等少人数指導による研究の導入、３～６年生は一斉指導における個に応じた指導の工夫に取り組んでいる。

など

(2)年次ごとの計画

平成14年度

○　国語科研究のテーマ、内容、方法等

テーマ　**生き生きと取り組む言語活動を通して一人一人に確かな基礎・基本を**

国語科の基礎・基本の定着

個に応じた指導形態のあり方
・1C1T形態の工夫
・1C2T形態の工夫
　習熟度別学習

個に応じた指導方法のあり方
・指導法の工夫
・教材の開発

指導に生きる評　価
・評価規準の作成
・具体的評価方法

本校児童の実態をみると、自分の考えや思いを伝える力や相手の気持ちを受け止めながら聞き取る力（コミュニケーション能力），また文章を正確に読み取る力や書く力も十分に身についているとはいえず、総合的な言語運用能力を育成していく必要があると考えた。「話すこと」は、子どもたちにとって身近な活動であり、また国語科の三領域の言語活動と言語事項は互いに関連し合って言語生活を支えている。

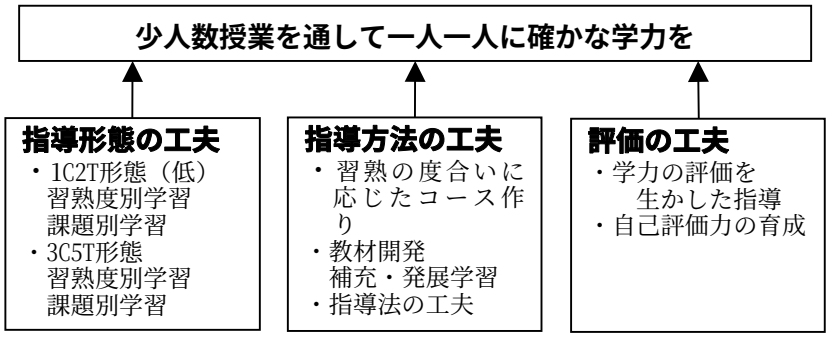
そこで、１４年度は「話すこと・聞くこと」を切り口とし、「書くこと」「読むこと」の領域も視野に入れながら伝え合う力を育て、児童が身につけている学習内容や方法を生かし、個に応じた指導のあり方も模索していきたいと考えた。

平成14年度	○算数科研究のテーマ、研究内容、方法等 テーマ　**「少人数授業を通して一人一人に確かな基礎・基本を」** 算数科の基礎・基本の定着 **個に応じた指導形態のあり方** ・1C2T 習熟度別学習 ・3C4T 習熟度別学習 課題別学習 **個に応じた指導方法のあり方** ・指導法の工夫 ・教材の開発 **個に応じた評価のあり方** ・評価規準の作成 ・具体的評価方法 本校では、学習の基礎・基本をしっかりと習得させることが、２１世紀を主体的に生きる子ども達を育成させるために不可欠と考え、いくつかの取り組みを行ってきた。 本校がこれまでに研究を積み重ねてきたT.T(1C2T)による指導もその一環をなすものであるが、１３年度に初めて３年生から６年生の算数科において少人数授業による指導法の改善を試みた。 少人数授業では、児童一人一人に目が届きやすくなり、課題別・習熟度別のコース学習と組み合わせることにより、個に応じた学習が可能になり、基礎的な知識と技能をかなり効果的に身につけさせることができた。 １４年度は、それを基にして、さらに少人数授業の形態や内容を工夫することにより、基礎的な知識・技能のみならず、創造的・発展的な物事を考える力や自ら進んで学習したことを生活に生かそうとする力、すなわち算数科の基礎・基本を児童一人一人に身につけさせたいと考えた。

平成15年度	○　テーマ **確かな学力の向上を図る教育活動を求めて** **～豊かな人間性を培い、基礎・基本の確実な定着を～** ○　研究の見通し きめ細かな指導を通して個に応じた支援を計画的、継続的に進めていきながら、探究心、協調性、自己肯定力など学力を支える豊かな人間性を学級集団や学校内外における全ての学習活動を通して育てていくことにより、児童がより確かな学力を身につけることができるであろうと考え、本主題を設定した。 ○　研究の内容・方法 国語科 **きめ細かな指導を通して一人一人に確かな学力を** **指導形態の工夫** ・効果的な指導形態の追究 ・習熟や興味関心に応じたコース別学習（低学年） （１C2T形態） （１C3T形態） ・1C1Tにおけるコース別学習 **指導方法の工夫** ・ねらいを明確にした授業つくり ・基礎的な学習の徹底 ・一人一人が参加できる場や活動 ・個に応じたきめ細かな支援 ・補充・発展学習 **評価の工夫** ・評価規準に基づく授業つくり ・学習意欲を高める自己評価 ・互いのよさを認め合う相互評価

平成15年度

算数科



１．学力を支える豊かな人間性の育成
- 好ましい人間関係を築き、自己肯定感を育む学級経営の充実
- 探究心、学習意欲を高める教育活動
- 思いやりの心を育てる異学年、校外の人との交流等

２．その他の取り組み
①キラキラタイム　年間計画をもとに国語科・算数科の基礎的な学力の定着を図る。（週３回１５分間）
②学級タイム　個に応じた補充学習、児童と教師のふれ合いの時間
③かがやき活動　音声言語による表現力の向上及び異学年交流活動

３．学力の把握
県基礎学力調査・自校作成学力テスト・単元末評価テストの分析と活用

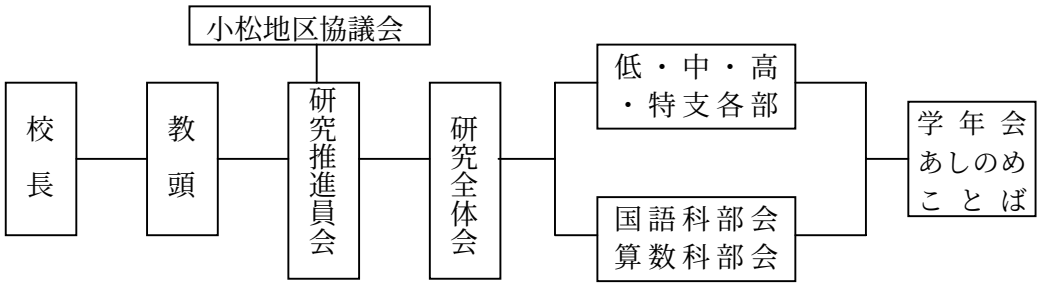
４．家庭との連携
- 学校公開・参観日の授業公開、学校便り発行、アンケート調査の実施
- 基本的な生活習慣の確立、家庭学習の習慣づけ

上記の研究内容と方法を全職員で共通理解した後、計画的に継続的に実践し、学期毎に成果と課題について振り返り、取り組みの改善を行い、研究を進めてきた。

定期的に授業研究会や講師を招いた学習会を設け、指導・助言をいただき実践を充実させてきた。また、市や県が行う研修会を校内研修の機会と捉え、研修内容の共有化を図った。

○　テーマ
平成１５年度を継続の予定
○　研究の見通し
平成１５年度を継続の予定
○　研究の内容・方法
２年間の研究実践さらに充実させ、本事業を検証・総括していきたい。

(3)　研究推進体制



授業実践を充実させるために、低・中・高学年ブロック部会を新しく設け、教材研究など、より実践につながる協議ができるように工夫した。

Ⅲ　平成１５年度の研究の成果及び今後の課題

１．研究の成果

○国語科

①　４０人学級の低学年では、国語科・算数科で少人数授業を実施することにより、個々に目が届く学習環境の中で、児童は落ち着いて学習に取り組んだ。そのことにより、国語科の基礎・基本をしっかりと身につけることができ、学習意欲も高まった。

②　国語科で基礎的な学習の徹底を掲げ、全校で漢字調査を行い、実態把握に照らした指導の積み重ねにより漢字力の定着に結びついた。聞くことに力を入れた指導により、他教科にも良い影響を与え、効果があった。

③　「言語に関する知識・理解」（２～６年生の単元評価テスト）については、

④　１学期にはＣと判定された児童の４割が２学期にはＢ基準を達成した。

⑤　学習状況を多様な方法で評価し、補助簿に記録を継続することで、ペーパーテストでは測定しにくい学力を把握することができた。

○算数科

①　様々な指導形態の工夫により、児童の学習状況に細かく対応できた。特に習熟度別学習を取り入れた単元では、児童の理解が一段と深まり、県学力基礎調査の達成率が県全体を１０Ｐ上回るなど基礎・基本の定着に確実につながった。また、児童向け習熟度別振り返りカードでも９割の児童が習熟度別学習に満足感を持ち、計画的に行われるコース別学習を楽しみにしている。

②　パソコン活用や様々な算数的活動の導入により、児童の学習意欲が向上し、学習内容の理解を深めることができた。

③　学力テストや単元評価テストの分析を生かし、数学的な思考力の向上を図る取り組みを進めることができた。また、キラキラタイムの中で、個人的に支援が必要な児童へ補充的な指導を積み重ねることにより、基礎的な技能が向上している。

○その他

①　教師の協同体制と授業改善への意識が高まり、個々の教師の授業力が向上した。

②　授業公開や学校便りを通して、少人数授業や習熟度別学習への保護者の理解が深まった。児童や保護者へのアンケート調査の結果、習熟度別学習に肯定的な反応が得られたとともに、取り組みがより具体化した。

２．今後の課題

・　効果的な課題別・習熟度別学習の単元設定や補充的・発展的な教材開発、指導法をさらに工夫する。
・　一斉指導や等質少人数授業の個に応じた指導の充実と児童の学習意欲を向上させる授業を展開する。
・　単元構想のもと、評価規準・基準を明確にし、指導と一体化を図る評価について共通理解し、実践する。
・　個人的な支援が多く必要な児童への支援体制の多様な方法を確立する。
・　学年経営・学級経営の基盤のもと、授業実践を充実させる。
・　家庭との連携のもと、家庭学習の習慣づけを図る。
・　ペーパーテストでは測定しにくい学力の把握方法の検討と研究成果としての学力の検証を進める。

Ⅳ　学力等把握のための学校としての取組

５月	・県基礎学力調査（６年　国語・算数・社会・理科）
３月	・本校作成学力テスト（全学年　国語科・算数科） 指導計画及び指導法の改善のため、また教師が各学年の指導事項を確認するため。 ・業者学力テスト（全学年　国語科・算数科） 本校作成学力テストと併用し、児童の学力をより客観的に把握するため。
学期毎	・単元末評価テスト（全学年　国語科・算数科） 結果を観点毎に学期末に集計分析し、児童の学力を把握し、次学期の指導に生かすため。

Ⅴ　フロンティアスクールとしての研究成果の普及

＜研究会、説明会の開催＞

・平成１５年　６～１月（市内小学校及び学力フロンティア関係校）

本校における研究授業や学習会を公開し、研究の経過・成果の普及を図った。（年間６回）

・平成１５年　６・９月・１１月（保護者、地域の人たち）

学校公開日に授業を公開し、学力向上フロンティア事業の取り組み状況や成果を知らせる。（年間４日）

・平成１５年　１０月２３日（県内小中学校関係者対象）

中間研究発表会を開催した。県内から多数の参加者を迎え、本校の研究経過と成果を公開するとともに学力の育成に向けて、課題を持ち参加した教師同士で協議を深めることができた。

・平成１６年　１１月予定　（県内外小中学校およびフロンティア関係校）

３ヵ年の学力向上フロンティア事業の成果を公開、普及するために総括研究発表会を開催の予定している。

＜研究成果普及のための冊子作成＞

・平成１６年　3月　１５年度研究紀要「スパイラル」を管内小中学校に配布し、本校の研究実践を普及する。

＜フロンティティチャーとしての活動＞

・要請のあった学校へ少人数指導の取り組みについて助言をしたり、県教育センターにおいて習熟度別指導講座で実践報告を行ったりした。

・金沢市の学力向上フロンティア校の公開研究発表会でフロンティア校の取り組みを報告するパネラーを務めた。

＜研究成果の普及活動の成果＞

公開研究会参加者の感想より

・少人数の多様なコースを組むこと自体が個に応じたきめ細かな支援になっており、コース設定の工夫に感心しました。

・学力フロンティア校の指定を受けています。先進的な習熟度別学習の取り組みを参考にさせていただき、考えていきたいと思います。

・学力や基礎・基本の捉え方が先生同士しっかりと共通理解されていると感じました。大変なご苦労だと思いますが、先生方の研究に対する姿勢に学ぶことができました。

◇　次の項目ごとに、該当する箇所をチェックすること。（複数チェック可）

【新規校・継続校】　□１５年度からの新規校　・１４年度からの継続校

【学校規模】　□６学級以下　□７～１２学級
□１３～１８学級　・１９～２４学級
□２５学級以上

【指導体制】　・少人数指導　□Ｔ．Ｔによる指導
□一部教科担任制　●その他

【研究教科】　・国語　□社会　・算数　□理科
□生活　□音楽　□図画工作　□家庭
□体育　□その他

【指導方法の工夫改善に関わる加配の有無】　・有　□無